

京都国立近代美術館 収集の概要（令和7年度）

京都国立近代美術館は、関西さらには西日本において近現代の美術・工芸を扱う中心的な機関として活動することを目的とし、地域性に目配りしつつも、日本の近現代美術史の核となる作品や、代表的作家の各時代における重要作品を積極的に収集している。さらに、世界における日本の美術・工芸の位置づけを常に考えることを旨とし、その影響関係に係る国外の近現代美術の収集にも取り組み、加えて収蔵作家のジェンダーバランスにも配慮するよう努めている。

令和7年度も、以上の方針を踏襲し、多様なジャンルの作品を収集した。中でも海野勝珉（1844-1915）の《鴛鴦岩象嵌銀製花瓶》と山田宗美（1871-1916）の《鉄打出 熊置物》は、東宮御所や宮内省に納品され、明治の工芸における最も高度な技を伝える作品であるといえる。明治の工芸は今や海外でも人気が高まりつつあるが、当館が近年収集に力を入れてきた分野でもあり、このたびの2点の収蔵によってその一層の充実化を図った。また、ネイサン・ラーナー（1913-1997）の写真162点からなるコレクションは、アメリカにおいてドイツのバウハウスの流れを組むモダニズム美術の継承者、シカゴ派の写真家として注目されつつある彼の貴重な初期作品群とともに、日本などで撮影された作品群を含み、しかも作家本人によるアーカイヴである点でも極めて意義深い。当館が重点的に収集してきた写真部門をさらに充実させることができた。

かねて充実化の重点領域となっている現代作家の作品としては、当館で大規模な個展を開催して大いに注目を集めたビビロッチィ・リスト（1962- ）の《愛撫する円卓》をはじめ、女性作家の活躍に注目し、作品を購入した。

京都国立近代美術館 美術作品購入一覧（令和7年度）

★＝特別予算購入

1	<table><tr><td>種別</td><td>:</td><td>日本画</td></tr><tr><td>作者名</td><td>:</td><td>小野竹喬（1889-1979）</td></tr><tr><td>作品名</td><td>:</td><td>海</td></tr><tr><td>制作年</td><td>:</td><td>1963年（昭和38年）</td></tr><tr><td>材質・形状</td><td>:</td><td>紙本着色／額装</td></tr><tr><td>寸法</td><td>:</td><td>52.9×81.1</td></tr><tr><td>解説</td><td>:</td><td>詩情豊かな日本の風景を描き続け、文化勲章を受章するなど、近現代京都画壇を代表する日本画家として知られる小野竹喬が、宮崎県の青島に取材して描いたもの。実際に青島を訪れたのは1940年で、同構図のデッサンはその6年後、本画は更に17年後の1963年に発表された。自然風景とめぐり合い、対話し、スケッチし、幾度も筆を重ね、時間をかけて心のなかの景色として作品化する作者ならではの。戦後の竹喬作品にしては珍しく、岩がハッキリとした輪郭線で括られ、生で厳しい感じがするのは、戦前の名残があるからだろう。</td></tr><tr><td>取得額</td><td>:</td><td>11,000,000円</td></tr><tr><td>展示予定</td><td>:</td><td>2029年度開催予定の小野竹喬回顧展で使用予定</td></tr></table>	種別	:	日本画	作者名	:	小野竹喬（1889-1979）	作品名	:	海	制作年	:	1963年（昭和38年）	材質・形状	:	紙本着色／額装	寸法	:	52.9×81.1	解説	:	詩情豊かな日本の風景を描き続け、文化勲章を受章するなど、近現代京都画壇を代表する日本画家として知られる小野竹喬が、宮崎県の青島に取材して描いたもの。実際に青島を訪れたのは1940年で、同構図のデッサンはその6年後、本画は更に17年後の1963年に発表された。自然風景とめぐり合い、対話し、スケッチし、幾度も筆を重ね、時間をかけて心のなかの景色として作品化する作者ならではの。戦後の竹喬作品にしては珍しく、岩がハッキリとした輪郭線で括られ、生で厳しい感じがするのは、戦前の名残があるからだろう。	取得額	:	11,000,000円	展示予定	:	2029年度開催予定の小野竹喬回顧展で使用予定	
種別	:	日本画																											
作者名	:	小野竹喬（1889-1979）																											
作品名	:	海																											
制作年	:	1963年（昭和38年）																											
材質・形状	:	紙本着色／額装																											
寸法	:	52.9×81.1																											
解説	:	詩情豊かな日本の風景を描き続け、文化勲章を受章するなど、近現代京都画壇を代表する日本画家として知られる小野竹喬が、宮崎県の青島に取材して描いたもの。実際に青島を訪れたのは1940年で、同構図のデッサンはその6年後、本画は更に17年後の1963年に発表された。自然風景とめぐり合い、対話し、スケッチし、幾度も筆を重ね、時間をかけて心のなかの景色として作品化する作者ならではの。戦後の竹喬作品にしては珍しく、岩がハッキリとした輪郭線で括られ、生で厳しい感じがするのは、戦前の名残があるからだろう。																											
取得額	:	11,000,000円																											
展示予定	:	2029年度開催予定の小野竹喬回顧展で使用予定																											
2	<table><tr><td>種別</td><td>:</td><td>日本画</td></tr><tr><td>作者名</td><td>:</td><td>土田麦僊（1887-1936）</td></tr><tr><td>作品名</td><td>:</td><td>桃源図</td></tr><tr><td>制作年</td><td>:</td><td>1915年（大正4年）</td></tr><tr><td>材質・形状</td><td>:</td><td>絹本着色／軸装</td></tr><tr><td>寸法</td><td>:</td><td>143.6×51.3</td></tr><tr><td>解説</td><td>:</td><td>土田麦僊は、近代京都画壇において重要な役割を果たした国画創作協会の中心人物の一人である。本作は作品に年紀はないが、箱書から1915年（大正4年）の制作と考えられる。麦僊は1915年の4月と6月に吉野へ行っており、この取材旅行で着想を得た可能性があり、南画（文人画）的要素を色濃く示すこの時期の代表作の一つである。</td></tr><tr><td>取得額</td><td>:</td><td>1,100,000円</td></tr><tr><td>展示予定</td><td>:</td><td>2026年度第3回コレクション展にて展示予定</td></tr></table>	種別	:	日本画	作者名	:	土田麦僊（1887-1936）	作品名	:	桃源図	制作年	:	1915年（大正4年）	材質・形状	:	絹本着色／軸装	寸法	:	143.6×51.3	解説	:	土田麦僊は、近代京都画壇において重要な役割を果たした国画創作協会の中心人物の一人である。本作は作品に年紀はないが、箱書から1915年（大正4年）の制作と考えられる。麦僊は1915年の4月と6月に吉野へ行っており、この取材旅行で着想を得た可能性があり、南画（文人画）的要素を色濃く示すこの時期の代表作の一つである。	取得額	:	1,100,000円	展示予定	:	2026年度第3回コレクション展にて展示予定	
種別	:	日本画																											
作者名	:	土田麦僊（1887-1936）																											
作品名	:	桃源図																											
制作年	:	1915年（大正4年）																											
材質・形状	:	絹本着色／軸装																											
寸法	:	143.6×51.3																											
解説	:	土田麦僊は、近代京都画壇において重要な役割を果たした国画創作協会の中心人物の一人である。本作は作品に年紀はないが、箱書から1915年（大正4年）の制作と考えられる。麦僊は1915年の4月と6月に吉野へ行っており、この取材旅行で着想を得た可能性があり、南画（文人画）的要素を色濃く示すこの時期の代表作の一つである。																											
取得額	:	1,100,000円																											
展示予定	:	2026年度第3回コレクション展にて展示予定																											
3	<table><tr><td>種別</td><td>:</td><td>日本画</td></tr><tr><td>作者名</td><td>:</td><td>広田多津（1904-1990）／向井久万（1908-1987）</td></tr><tr><td>作品名</td><td>:</td><td>裸女・月明裸婦</td></tr><tr><td>制作年</td><td>:</td><td>1951年（昭和26年）</td></tr><tr><td>材質・形状</td><td>:</td><td>紙本着色／額装（対）</td></tr><tr><td>寸法</td><td>:</td><td>（各）133.7×44.9</td></tr><tr><td>解説</td><td>:</td><td>画面いっぱいに描かれた、健康的な肌色をした座像と、青白い肌色をした立像。対照的な裸婦像は、この3年前の1948（昭和23）年、中堅作家として活躍していた官展から飛び出し、「世界性に立脚する日本絵画の創造を期」して創造美術を立ち上げた広田多津、向井久万夫妻によるもの。二人ともに戦前から人物画を描き、裸婦像も発表していたが、戦後の新しい時代に即応する日本画を生み出すため、改めて裸婦デッサンの基礎勉強を行っており、それぞれの作品を見比べることによりその成果の特徴をよりよく知ることが出来る。</td></tr><tr><td>取得額</td><td>:</td><td>5,500,000円</td></tr><tr><td>展示予定</td><td>:</td><td>自分がコレクション展の担当をする折に展示予定</td></tr></table>	種別	:	日本画	作者名	:	広田多津（1904-1990）／向井久万（1908-1987）	作品名	:	裸女・月明裸婦	制作年	:	1951年（昭和26年）	材質・形状	:	紙本着色／額装（対）	寸法	:	（各）133.7×44.9	解説	:	画面いっぱいに描かれた、健康的な肌色をした座像と、青白い肌色をした立像。対照的な裸婦像は、この3年前の1948（昭和23）年、中堅作家として活躍していた官展から飛び出し、「世界性に立脚する日本絵画の創造を期」して創造美術を立ち上げた広田多津、向井久万夫妻によるもの。二人ともに戦前から人物画を描き、裸婦像も発表していたが、戦後の新しい時代に即応する日本画を生み出すため、改めて裸婦デッサンの基礎勉強を行っており、それぞれの作品を見比べることによりその成果の特徴をよりよく知ることが出来る。	取得額	:	5,500,000円	展示予定	:	自分がコレクション展の担当をする折に展示予定	
種別	:	日本画																											
作者名	:	広田多津（1904-1990）／向井久万（1908-1987）																											
作品名	:	裸女・月明裸婦																											
制作年	:	1951年（昭和26年）																											
材質・形状	:	紙本着色／額装（対）																											
寸法	:	（各）133.7×44.9																											
解説	:	画面いっぱいに描かれた、健康的な肌色をした座像と、青白い肌色をした立像。対照的な裸婦像は、この3年前の1948（昭和23）年、中堅作家として活躍していた官展から飛び出し、「世界性に立脚する日本絵画の創造を期」して創造美術を立ち上げた広田多津、向井久万夫妻によるもの。二人ともに戦前から人物画を描き、裸婦像も発表していたが、戦後の新しい時代に即応する日本画を生み出すため、改めて裸婦デッサンの基礎勉強を行っており、それぞれの作品を見比べることによりその成果の特徴をよりよく知ることが出来る。																											
取得額	:	5,500,000円																											
展示予定	:	自分がコレクション展の担当をする折に展示予定																											
4	<table><tr><td>種別</td><td>:</td><td>油彩</td></tr><tr><td>作者名</td><td>:</td><td>椿 貞雄（1896-1957）</td></tr><tr><td>作品名</td><td>:</td><td>赤土の塔</td></tr><tr><td>制作年</td><td>:</td><td>1920年（大正9年）</td></tr><tr><td>材質・形状</td><td>:</td><td>油彩、画布／額装</td></tr><tr><td>寸法</td><td>:</td><td>65.0×83.0</td></tr><tr><td>解説</td><td>:</td><td>椿貞雄は、大正期に岸田劉生を中心に結成された草土社において中心メンバーとして活動していた。この作品はその時期の貴重な作例であり、1920（大正9）年の再興第7回日本美術院展覧会（院展）洋画部に出品された。同展覧会に出品されて以降は生前の個展等にも出たことがなかった可能性が高く、そうなると105年振りに発見されたことになる。</td></tr><tr><td>取得額</td><td>:</td><td>4,400,000円</td></tr><tr><td>展示予定</td><td>:</td><td>2026年度の当館コレクションギャラリーにおけるテーマ展「郊外と都市」において展示。</td></tr></table>	種別	:	油彩	作者名	:	椿 貞雄（1896-1957）	作品名	:	赤土の塔	制作年	:	1920年（大正9年）	材質・形状	:	油彩、画布／額装	寸法	:	65.0×83.0	解説	:	椿貞雄は、大正期に岸田劉生を中心に結成された草土社において中心メンバーとして活動していた。この作品はその時期の貴重な作例であり、1920（大正9）年の再興第7回日本美術院展覧会（院展）洋画部に出品された。同展覧会に出品されて以降は生前の個展等にも出たことがなかった可能性が高く、そうなると105年振りに発見されたことになる。	取得額	:	4,400,000円	展示予定	:	2026年度の当館コレクションギャラリーにおけるテーマ展「郊外と都市」において展示。	
種別	:	油彩																											
作者名	:	椿 貞雄（1896-1957）																											
作品名	:	赤土の塔																											
制作年	:	1920年（大正9年）																											
材質・形状	:	油彩、画布／額装																											
寸法	:	65.0×83.0																											
解説	:	椿貞雄は、大正期に岸田劉生を中心に結成された草土社において中心メンバーとして活動していた。この作品はその時期の貴重な作例であり、1920（大正9）年の再興第7回日本美術院展覧会（院展）洋画部に出品された。同展覧会に出品されて以降は生前の個展等にも出たことがなかった可能性が高く、そうなると105年振りに発見されたことになる。																											
取得額	:	4,400,000円																											
展示予定	:	2026年度の当館コレクションギャラリーにおけるテーマ展「郊外と都市」において展示。																											

5	種別	油彩
	作者名	松本竣介（1921-1948）
	作品名	郊外
	制作年	1938年（昭和13年）
	材質・形状	油彩、板／額装
	寸法	52.5×72.5
	解説	1948（昭和23）年に満年齢わずか36歳で亡くなった松本竣介の約20年間の画業は、1940（昭和15）年前後を機に前期と後期に分けることができる。彼がアトリエ「綜合工房」と住居を構えた東京市淀橋区下落合（現在の新宿区中井）の郊外風景を描いた本作品には、後期の画業を代表する都会風景画シリーズの描線の兆しと、それと同時並行して制作された郊外風景画シリーズの色面表現の萌芽とがともに見られ、前期と後期との転換点にある貴重な作例として認められる。
	取得額	44,000,000円
6	展示予定	2025年度の当館コレクションギャラリーにおけるテーマ展「松本竣介・巖光・麻生三郎」において展示したのち、2026年度にもテーマ展「郊外と都市」において展示。
	種別	油彩
	作者名	山口 薫（1907-1968）
	作品名	あや子あやとり（アヤコ十六）
	制作年	1959年（昭和34年）
	材質・形状	油彩、画布／額装
	寸法	45.5×37.9
	解説	山口薫は、昭和の戦前から村井正誠や長谷川三郎、瑛九等とともに実験精神に富んだ活動を展開し、戦後も、写実を基礎としながらも造形の純粋性を探求し、抽象度を高めた。1940年代後半から1950年代後半にかけて抽象絵画に近い風景表現を試みたが、それと並行して1950年前後からは長女の絢子をモデルにした「あや子」シリーズを数多く制作した。それらの中でも広く愛されているのが本作品である。
7	取得額	5,500,000円
	展示予定	2025年度の当館コレクションギャラリーにおけるテーマ展「山口薫と彼をめぐる画家たち」において展示。
	種別	陶芸
	作者名	荒川豊蔵（1894-1985）
	作品名	瀬戸黒茶碗
	制作年	昭和中-後期
	材質・形状	陶器
	寸法	9.8(h)×11.5×11.5
8	解説	重要無形文化財保持者（人間国宝）の荒川豊蔵の瀬戸黒茶碗。わずかに広がりながらほぼ直線的に立ち上がる筒形の形状でへらによる面取りがなされている。瀬戸黒は焼成中に窯から取り出して急冷することで漆黒の釉調を得る技術である。一部に釉の縮れがみられるものの総じてたつぷりとよく溶けた釉が掛かっている。箱書に「茶碗」と記していることから豊蔵の陶歴における中期以降の作であることがわかる。
	取得額	2,750,000円
	展示予定	次年度以降のコレクション展で展示予定
	種別	陶芸
	作者名	石黒宗麿（1893-1968）
	作品名	千點瓷盃
	制作年	1940年（昭和15年）頃
	材質・形状	陶器
9	寸法	5.3(h)×15.8
	解説	鉄釉陶器の技法で重要無形文化財保持者（人間国宝）となった石黒宗麿の平茶碗で、中国の磁州窯系の様式・技術が用いられている。轆轤で成形した平碗に白化粧、黒化粧を掛け、その上から「飛甍」の手法で黒化粧の層を刻み取ることで内外両面にリズムカルな点文を無数に表している。見込みには黄緑色の細かな降灰がみられるが、宗麿らしい瀟洒な優品である。
	取得額	2,420,000円
	展示予定	次年度以降のコレクション展で展示予定
	種別	金工
	作者名	海野勝珉（1844 -1915）
	作品名	鴛鴦岩象嵌銀製花瓶
	制作年	明治中－後期
	材質・形状	銀、臙銀、金、赤銅、素銅／花瓶（一対）
	寸法	(各)36.7(h)×16.0×16.0
	解説	帝室技芸員の海野勝珉の一対の花瓶。わずかに胴が張り、なだらかな撫肩、ラッパ上の口部の形状。銀地に臙銀、金、赤銅、素銅による象嵌高彫および片切彫によって鴛鴦が表現される。付属する木胎漆黒の台のラベルより皇室内で使用されていたことがわかる。本作の図案が海野家から東京藝術大学美術館に寄贈された「海野勝珉関係資料」に含まれている。
	取得額	44,000,000円
	展示予定	2025年度第4回コレクション展で展示

10 	種別：金工 作者名：山田宗美（1871-1916） 作品名：鉄打出 熊置物 制作年：明治後期 材質・形状：鉄 寸法：22.8(h)×18.6×22.8 / 1,000g 解説：帝室技芸員に内定しながら発表直前に死去した金工家・山田宗美による代表作で宮内省御用品。熊の優しい表情や迫真的な毛並みの雰囲気が見事に表現されている。一枚のごく薄い鉄板を均一の厚さを保ちながら金槌を使って打ち延ばし、打ち絞ることで精巧な立体造形を作り出す山田独自の鉄打出の技法で制作されている。 取得額：33,000,000円 展示予定：2025年度第4回コレクション展で展示
11	種別：木工 作者名：大野昭和斎（1912-1996） 作品名：拭漆桑造飾箱 制作年：1968年(昭和43年) 材質・形状：桑、拭漆 寸法：12.4(h)×26.0×15.6 解説：木工芸の重要無形文化財保持者（人間国宝）の大野昭和斎の飾箱。第15回日本伝統工芸展日本工芸会会長賞受賞作。大野が用いる技法は指物、刳物、木象嵌など幅広いが、特に指物を得意とする。本作は指物の技術に狂いがなく、桑材の杣目が拭漆によって優美に表れた優品である。 取得額：1,100,000円 展示予定：次年度以降のコレクション展で展示予定
12	種別：漆工 作者名：黒田辰秋（1904-1982） 作品名：乾漆五彩牡丹紋飾手篋 制作年：1940年（昭和15年） 材質・形状：漆、乾漆 寸法：19.0×25.4×15.8 解説：木工芸の重要無形文化財保持者（人間国宝）の黒田辰秋の飾箱で昭和47（1972）年に刊行された作品集『黒田辰秋 人と作品』に収録された代表作。乾漆の技法で成形後、色漆で緑味を帯びた地および浮彫のような牡丹の花弁（朱漆）と雌蕊（黄漆）を表している。黒田は具象的モチーフをあまり制作しておらず、ひとときわ珍しい作例である。 取得額：2,200,000円 展示予定：次年度以降のコレクション展で展示予定（2023年度の黒田辰秋展で展示）
13	種別：木工 作者名：黒田辰秋（1904-1982） 作品名：拭漆松衝立 制作年：1934年（昭和9年） 材質・形状：松、拭漆 寸法：93.5×160.0×48.5 解説：木工芸の重要無形文化財保持者（人間国宝）の黒田辰秋の松材による衝立。中央部分の八角形の枠の中に黒田を象徴する宝結文が模様の周囲を透かし彫りすることで表されている。木地に漆をたっぷりと吸わせ、さらに数十回も透漆を塗ってはふき取る拭漆の工程を重ねることで、木理を最大限に引き出している。 取得額：3,000,000円 展示予定：次年度以降のコレクション展で展示予定（2023年度の黒田辰秋展で展示）
14 	種別：水彩 作者名：ネイサン・ラーナー（Nathan Lerner 1913-1997） 作品名：無題 制作年：1940年代 材質・形状：ポスターカラー、インク、板 寸法：31.5×40.5 解説：シカゴ出身のネイサン・ラーナーは、絵画、写真、映画、プロダクトデザイン、建築など多岐にわたる領域で創作活動を展開し、アメリカでのバウハウスの流れを汲むモダニズム美術の継承者またはシカゴ派の写真家の一人。光源のような画面中央の白い円を背景に、さまざまな色彩の紙片を付けた4本の紐が吊り下げられ、周囲を水色の点描のタッチで埋めている。ニュー・バウハウスの教師モホイ＝ナジの影響を伺わせる抽象絵画として貴重な一作。 取得額：6,600,000円 展示予定：2026年度第1回コレクション展で展示している。

15 ★	種別： 水彩 作者名： ネイサン・ラーナー（Nathan Lerner 1913-1997） 作品名： 無題（壁面のためのプラン） 制作年： 1940年 材質・形状： ポスターカラー、段ボール紙 寸法： 32.5×32.0 解説： ニュー・バウハウスを通してモホイ＝ナジと出会ったラーナーは、光の使用に対する新しいアプローチを探るため、ライトボックスを用いて絵画や写真を制作した。段ボールの表面に小さな長方形の切り込みを多数入れ、赤や緑、黄などで着彩している。段ボールのわずかな凹凸を生かして、背景の点描で描かれた円との間に空間的奥行きをもたらししており、光とオブジェの関係を絵画化した作例である。光をメディアとして捉えた、モホイ＝ナジの造形理念をふまえた作例。 取得額： 4,400,000円 展示予定： 2026年度第1回コレクション展で展示している。
16 ★	種別： 写真 作者名： ネイサン・ラーナー（Nathan Lerner 1913-1997） 作品名： ポートフォリオ〈初期作品〉 制作年： － 材質・形状： ゼラチンシルバー・プリント／ポートフォリオ（35点組） 寸法： － 解説： 生前のラーナーによって5冊のポートフォリオとしてまとめられたものの一つ。1930年代に撮影された写真35点を含む。セルフポートレートや街の人々、建造物などを対象に、光と影の効果やクローズアップ、対角線構図、俯瞰などの技法で撮影され、ドイツ・バウハウスに端を発した新興写真の影響をうかがわせる。1930年代アメリカ社会の記録として、ソーシャル・ドキュメンタリーの系譜に位置付けられる。 取得額： 8,800,000円 展示予定： 2028年度以降の写真コレクションによる展覧会で展示予定。
17 ★	種別： 写真 作者名： ネイサン・ラーナー（Nathan Lerner 1913-1997） 作品名： ポートフォリオ〈マックスウェル・ストリート〉 制作年： － 材質・形状： ゼラチンシルバー・プリント（35点組） 寸法： － 解説： 生前のラーナーによって5冊のポートフォリオとしてまとめられたものの一つ。1935年頃から40年頃にかけて路上マーケットに集まる多様な人々を撮影した35点が含まれる。街の人々の生活の様子を親しみを込めて撮影したものが大半だが、一方でマネキンや雑然と置かれた商品、オブジェなどの人工物が日常生活に奇妙に紛れ込んだ、どこか違和感を覚えさせるイメージもあり、ラーナーの作風を知る上で重要である。 取得額： 8,800,000円 展示予定： 2028年度以降の写真コレクションによる展覧会で展示予定。
18 ★	種別： 写真 作者名： ネイサン・ラーナー（Nathan Lerner 1913-1997） 作品名： ポートフォリオ〈恐慌〉 制作年： － 材質・形状： ゼラチンシルバー・プリント（28点組） 寸法： － 解説： 生前のラーナーによって5冊のポートフォリオとしてまとめられたものの一つ。1929年からの世界恐慌の時期に、シカゴの労働者階級の様子を撮影した28点からなる。うなだれた男性や炭鉱夫の家族など失業者たちの絶望感や、家族の不安を切り取っている。 取得額： 8,800,000円 展示予定： 2028年度以降の写真コレクションによる展覧会で展示予定。
19 ★	種別： 写真 作者名： ネイサン・ラーナー（Nathan Lerner 1913-1997） 作品名： ポートフォリオ〈バウハウス・実験〉 制作年： － 材質・形状： ゼラチンシルバー・プリント（22点組） 寸法： － 解説： 生前のラーナーによって5冊のポートフォリオとしてまとめられたものの一つ。1937年のニュー・バウハウス入学から1940年代にかけて撮影された22点を含み、ライトボックスを用いた作品や多重露光など、実験的な傾向を示す作品が収められている。 取得額： 8,800,000円 展示予定： 2028年度以降の写真コレクションによる展覧会で展示予定。

20		種別	：	写真
		作者名	：	ネイサン・ラーナー（Nathan Lerner 1913-1997）
		作品名	：	ポートフォリオ〈日本・メキシコ・ヨーロッパ〉
		制作年	：	－
		材質・形状	：	ゼラチンシルバー・プリント（42点組）
		寸法	：	－
		解説	：	生前のラーナーによって5冊のポートフォリオとしてまとめられたものの一つ。1967年にピアニストの浅井清子と結婚したラーナーは、1971年に初めて日本へ撮影旅行に訪れている。その後8回にわたって来日した際に撮影した作品のほか、晩年にメキシコやヨーロッパで撮影した42点が含まれている。
		取得額	：	8,800,000円
		展示予定	：	2028年度以降の写真コレクションによる展覧会で展示予定。
21		種別	：	日本画
		作者名	：	榊原雨村（1885-1963）
		作品名	：	山羊図（仮）
		制作年	：	大正時代
		材質・形状	：	絹本着色（金地）／6曲屏風（1双）
		寸法	：	172.3×373.2
		解説	：	当館日本画コレクションの柱の一つである、国画創作協会（国展）創立会員榊原紫峰の兄。その他の土田麦僊、村上華岳といった創立会員達とは絵専の同期で、在学中からその画才や革新的な画風が高く評価された。しかし、国展には参加せず、画壇から離れて活動したため、地元京都の公的機関にも中小品が数点所蔵されるのみである。雨村の少ない出品歴を辿ると、動物画を得意としていたようで、唯一の文展出品作《日なが》も、本作同様、春の草原に憩うヤギの群れをモチーフとしている。出品作の行方が分からない現在、唯一の大作として貴重な作例である。
		取得額	：	5,500,000円
		展示予定	：	自分がコレクション展の担当をする折に展示予定
22		種別	：	日本画
		作者名	：	鳥居道枝（1902-1930）
		作品名	：	少女像
		制作年	：	1920年（大正9年）
		材質・形状	：	絹本着色／軸装
		寸法	：	172.0×69.5
		解説	：	肖像画というよりは、生活の一場面を切り取ったかのような本作品のモデルは、作者の妹・力枝と言われている。女学校を卒業し、岡本大更に入門して間もない10代の頃にもかかわらず、着崩れて皺になった着物や乱れた髪、上気して赤くなった肌と唇をリアルに描くことが出来るほど執拗に写生出来たのは、親しい間柄ゆえだろう。結果、この当時、日本画壇を席卷していた細密描写による人物像の中でも、特に印象に残る優品となった。道枝は、働く女性や、遊郭の女性などに取材し、女性のリアルで逞しい姿を写實的に描いたことで知られるが、20代の若さで世を去ったため殆んど作品が残っておらず、本作品は貴重な作例でもある。
		取得額	：	5,500,000円
		展示予定	：	今年度修復に出す予定。
23		種別	：	日本画
		作者名	：	岸竹堂（1826-1897）
		作品名	：	池辺の狐
		制作年	：	1861-1877年（文久元-明治初期）頃
		材質・形状	：	絹本着色／軸装
		寸法	：	136.9×70.4
		解説	：	近代京都画壇の黎明期において重鎮として活躍した岸派四代目・岸竹堂の作品である。月夜に池の中で泳ぐスッポンとキツネを描いており、スッポンは薄墨で描くことで水の中にいる様子を表し、キツネには彩色と繊細な毛描きを施すことでリアルな表現となっている。落款の書体から幕末～明治初期頃の制作と推測される。
		取得額	：	1,320,000円
		展示予定	：	2027年度コレクション展にて展示予定
24		種別	：	日本画
		作者名	：	甲斐庄楠音（1894-1978）
		作品名	：	畜生塚（習作）
		制作年	：	1919年（大正8年）
		材質・形状	：	絹本着色／額装
		寸法	：	26.5×23.0
		解説	：	大正期の京都の日本画家、甲斐庄（甲斐荘）楠音は、関白豊臣秀次の大勢の妻子が太閤豊臣秀吉の命により三条河原で虐殺された故事を知って衝撃を受け、大作《畜生塚》を構想したが、ミケランジェロの群像表現やレオナルド・ダヴィンチの陰影表現を意識し過ぎたためか思うようには完成できなかった（未完の屏風《畜生塚》は当館蔵）。その制作過程では数多くの素描を試み、習作も制作したが、中でも優れた習作の一つが本作品である。かねて存在を知られながらも行方不明とされていたが、2023年度「甲斐荘楠音の全貌」展の準備中に発見した。
		取得額	：	1,500,000円
		展示予定	：	痛みが激しいため、修復したのち、公開する予定。

25	種別：日本画 作者名：甲斐庄楠音（1894-1978） 作品名：悪女菩薩 制作年：1924年（大正13年）頃 材質・形状：絹本着色／額装 寸法：26.5×23.5 解説：大正期の京都日本画壇において国画創作協会で活躍した甲斐庄（甲斐莊）楠音は、「新興美人画家」の代表格として注目されたが、「悪魔主義、唯美主義、退廃主義」とも形容された当時の彼の画風をよく伝えるのが本作品である。盃を手にした太夫（最高位の遊女）の像であり、大作《春宵（花びら）》（当館蔵）に関連する作品として見ることができる。木村斯光や岡本神草とともに同じモデルで競作したとも見られ、大正期の京都における青年画家たちの制作環境を考える上でも興味深い。 取得額：3,000,000円 展示予定：痛みが激しいため、修復したのち、公開する予定。
26	 種別：染織 作者名：福本潮子(1945-) 作品名：東北ーⅠ 制作年：2011年（平成23年） 材質・形状：藤糸、反故紙、藍染、ぼかし染 寸法：208.0×82.0 解説：藍染の技法で国際的に活躍する福本潮子のタペストリー。2009年から始まる古布のシリーズの一つ。もとの衣服（襦袢）をほどき、衿や衽、袖や身頃などの部分を別々に藍で染めた後に矩形のタペストリーに仕立て上げたもの。本作は大正期の出羽地方の藤織り（縦糸に藤糸、緯糸は藤糸に反故紙を巻いた紙糸）の古布がもとになっており、軽くて堂々とした布に対して、斜めのラインの藍のぼかし染めがリズムよく施されている。 取得額：－ 展示予定：2026年度第1回コレクション展で展示
27	 種別：染織 作者名：福本潮子(1945-) 作品名：蝦夷 制作年：2023年（令和5年） 材質・形状：オヒョウ、藍染、ぼかし染 寸法：213.0×67.0 解説：藍染の技法で国際的に活躍する福本潮子のタペストリー。2009年から始まる古布のシリーズの一つ。もとの衣服（襦袢）をほどき、衿や衽、袖や身頃などの部分を別々に藍で染めた後に矩形のタペストリーに仕立て上げたもの。北海道に自生するオヒョウの木の皮で織られたアイヌの人々の仕事着を素材とし、シンプルに横と縦に藍染を施して力強い威厳を感じさせる作品に仕上げている。 取得額：－ 展示予定：次年度以降のコレクション展で展示予定
28	 種別：陶芸 作者名：秋山陽(1953-) 作品名：地質時代 16 制作年：2000年（平成12年） 材質・形状：陶 寸法：81.0×58.0×53.0(h) 解説：秋山陽は異なる層を重ね合わせて一体のものとした作品群に対して「地質時代」というシリーズ名を付けている。本作は上部と下部とを別に成形しそれらを一つの塊として仕上げている。秋山作品の特徴の一つである亀裂は轆轤で成形した円筒形の内部をバナーで強制的にあぶり、それを反転させることで生じたものである。荒々しい表情と轆轤による平滑な面とが一体化した優品である。 取得額：－ 展示予定：次年度以降のコレクション展で展示予定
29	 種別：陶芸 作者名：秋山陽(1953-) 作品名：Metavoid 9 制作年：2005年（平成17年） 材質・形状：陶 寸法：82.0×62.0×48.0(h) 解説：「Metavoid」とはvoid（空間、空虚、隙間）という語にmeta（越える、状態の変化）を組み合わせた作者の造語。「うつわ」の構造における内部と外部の関係や物質と空間の関係を探求することがテーマにある。本作は口の開いた繭のようなシンプルな形状で、内部に空間を内包したうつわの形状自体が内外の空間の境界を生み出しているという事実を視覚的に提示している。 取得額：－ 展示予定：次年度以降のコレクション展で展示予定

30 	種別：陶芸 作者名：亀井洋一郎(1974-) 作品名：Lattice receptacleー光の舞台 制作年：2005年（平成17年） 材質・形状：磁器、鋳込み 寸法：35.0×35.0×35.0(h) 解説：作品は鋳込みで磁器の立方体を複数作成し、柱部分を残しながら面を切り取って積み上げ、焼成時に各パーツを重力によって軸着させたもの。本作では8×8個の立方体を積み上げた外形に対して内部は立方体の数を減らして階段状とし、さらに上面を切り取らずに残すことでその面を境に光と影による図を浮かび上がらせている。 取得額：- 展示予定：次年度以降のコレクション展で展示予定
31 	種別：陶芸 作者名：亀井洋一郎(1974-) 作品名：Lattice receptacleー錐体のスクリーン 2 制作年：2009年（平成21年） 材質・形状：磁器、鋳込み 寸法：63.0×56.0×25.0(h) 解説：作品は鋳込みで磁器の立方体を複数作成し、柱部分を残しながら面を切り取って積み上げ、焼成時に各パーツを重力によって軸着させたもの。本作は立方体を垂直にではなく、斜めに積み上げた紡錐形に広がる形状である。そのために垂直、水平、斜めの関係において、より複雑な光と影の変化が生じている。 取得額：- 展示予定：次年度以降のコレクション展で展示予定
32 	種別：陶芸 作者名：亀井洋一郎(1974-) 作品名：Lattice receptacleー様相の舞台 1 制作年：2015年（平成27年） 材質・形状：磁器、鋳込み 寸法：65.0×11.0×56.0(h) 解説：作品は鋳込みで磁器の立方体を複数作成し、柱部分を残しながら面を切り取って積み上げ、焼成時に各パーツを重力によって軸着させたもの。本作は平面と立体のあいだにある壁面作品である。立方体の置き方によってトリック・アートのような視覚的効果が生じるが、一部の面の一部を残したことで視線が内部空間へと導かれ、中空構造というやきものの形態感を再認識させてくれる。 取得額：- 展示予定：次年度以降のコレクション展で展示予定
33 	種別：漆工 作者名：石塚源太(1982-) 作品名：感触の表裏 #30 制作年：2023年（令和5年） 材質・形状：漆、麻布、発泡スチロール球、2wayトリコット、乾漆技法 寸法：64.0×60.5×84.0(h) 解説：2019年のロエベファンデーションクラフトプライズ2019で大賞を受賞した世界的に注目される漆芸家。作品は漆特有の「つや」と漆造形固有の「被膜性」を視覚的に追求していくことから生まれる抽象形態である。本作は小さな球体を連ねることで大きな「塊」としたもので、球面と漆の光沢、幾層にも塗り重ねることによる変化に富んだ色面を通じて「表皮」（表面）に対する視覚のあり様（焦点を定めることのあいまいさ）を具現化させている。 取得額：- 展示予定：次年度以降のコレクション展で展示予定
34 	種別：漆工 作者名：石塚源太(1982-) 作品名：Absence, presence 制作年：2025年（令和7年） 材質・形状：漆、麻布、乾漆技法 寸法：88.0×47.5×35.0(h) 解説：2019年のロエベファンデーションクラフトプライズ2019で大賞を受賞した世界的に注目される漆芸家。作品は漆特有の「つや」と漆造形固有の「被膜性」を視覚的に追求していくことから生まれる抽象形態である。αのような形状の本作は、全体から部分を切り取って内部を開放することで、漆造形が「被膜」によるものであることを示し、作品形状と内部空間のあり方の同一性が視覚的に意識させられる。 取得額：- 展示予定：次年度以降のコレクション展で展示予定

35 	種別：漆工 作者名：石塚源太(1982-) 作品名：Loop Hole 制作年：2025年（令和7年） 材質・形状：漆、麻布、乾漆技法 寸法：67.5×54.0×38.0(h) 解説：2019年のロエベファンデーションクラフトプライズ2019で大賞を受賞した世界的に注目される漆芸家。作品は漆特有の「つや」と漆造形固有の「被膜性」を視覚的に追求していくことから生まれる抽象形態である。太いロープを巻いたような形状の頂点を開口部とした本作は、漆造形の「被膜」性および塗料としての漆の質感（外面の朱漆と内面の黒漆）によって内部空間に対する奥行きを感覚を宙ずりにさせるものである。 取得額：－ 展示予定：次年度以降のコレクション展で展示予定
36 	種別：その他 作者名：荒木悠(1985-) 作品名：利未記異聞 WRONG REVISION 制作年：2016年（平成28年） 材質・形状：HDビデオ、カラー、ステレオ 寸法：15分 解説：岡山県に伝わる「干し蛸」の風習がキリスト教の磔刑図と似ていることに着想を得て創作された映像作品。干し蛸と磔刑図といったイメージの連鎖に加え、芥川龍之介の短編小説『煙草と悪魔』を翻案に、旧約聖書のレビ記や歴史資料、現代まで伝わる風習などを重ねて再編集することで、歴史や既存の物語の誤った改訂版（WRONG REVISION）をつくりだしている。歴史記述のフィクション性をユーモラスに示した作品。 取得額：－ 展示予定：2027年度以降のコレクション展で展示予定
37 	種別：その他 作者名：ピピロッティ・リスト(1962-) 作品名：愛撫する円卓 制作年：2017年（平成29年） 材質・形状：シングルチャンネル・ビデオ、テーブル、食器、カーペット 寸法：サイズ可変、20分 解説：食器が置かれたテーブルに万華鏡のように色鮮やかな映像を投影したビデオ・インスタレーション作品。家具と映像を組み合わせた本作は、ビデオ・インスタレーションにおける鑑賞者の身体と映像との新たな関係を提案する、近年のリストの関心事を反映した作品。 取得額：－ 展示予定：2027年度の企画展で展示予定。
38 	種別：その他 作者名：野村仁(1945-2023) 作品名：Dryice 制作年：1969年（昭和44年）/2003年（平成15年）頃 材質・形状：ゼラチン・シルバー・プリント 寸法：94.0×794.0 解説：ドライアイスが昇華して変化する様子を、その重量と時刻の記録とともに連続して撮影した野村仁の初期の代表作。野村が1969年から1970年にかけて写真を用いる制作へと移行する過程を示す最重要作品だが、あいにく当時出品されたオリジナルのプリントは失われており、本作は2000年代に作家の監修のもと再制作されたプリントである。 取得額：12,925,000円 展示予定：2027年度以降の企画展で展示予定。
39 	種別：その他 作者名：野村仁(1945-2023) 作品名：重心の移動 制作年：1972年（昭和47年） 材質・形状：ゼラチン・シルバー・プリント 寸法：88.0×1100.0 解説：地面に立つ野村が姿勢を前へ傾ける行為を固定カメラで記録した連続写真の作品。同名の16ミリフィルム作品も残されている。作家の身体運動が引き起こす空間と時間のありようを可視化している。当時の野村は日常行為をさまざまなメディアで記録し、現象と知覚にまつわる実験的作品を残した。本作は、1972年京都ビエンナーレ出品作の稀少なオリジナル・プリント。 取得額：11,000,000円 展示予定：2027年度以降の企画展で展示予定

40 	種別：その他 作者名：毛利悠子(1980-) 作品名：パレード 制作年：2011年（平成23年） 材質・形状：ベルリラ、風船、送風機、アコーディオン、ドラム、拡声器、水差し、泡立て器、電球ほか／インスタレーション 寸法：サイズ可変 解説：テーブルクロスの様様を譜面としてコンピューターに読み込ませて電流に変換することで、アコーディオンやドラム、風船、日用品などが楽器として自動演奏されるキネティック・サウンド・インスタレーション。オブジェの偶発的な動きと音によって、鑑賞者は目に見えないエネルギーの循環に気づかされる。毛利がブリコラージュの手法を多用していた時期の代表作の一つであり、本作のエディション2/2をボンビドゥー・センターが所蔵している。 取得額：－ 展示予定：2025年度「セカイノコトワリ」展で展示したほか、2027年1月から愛知県美術館での巡回展での展示を予定している。
41 	種別：その他 作者名：田中功起(1975-) 作品名：一時的なスタディ：ワークショップ＃1「1946～52年占領期と1970年人間と物質」 制作年：2015年（平成27年） 材質・形状：5チャンネル・ビデオ・インスタレーション、布、ステイトメント 寸法：－ 解説：展示会場となる美術館のさまざまな歴史に注目し、4名のファシリテーターと8名の高校生によるワークショップを撮影・記録したもの。田中の長編ビデオ作品において、それまでの参加者が一つのタスクを共同で行う内容から、複数のタスクをワークショップ形式で行い社会問題などについてディスカッションを行うという新たな手法が試みられた。 取得額：－ 展示予定：2025年度「セカイノコトワリ」展で展示したほか、2027年1月から愛知県美術館での巡回展での展示を予定している。
42 	種別：その他 作者名：田中功起(1975-) 作品名：10年間 制作年：2025年（令和7年） 材質・形状：シングルチャンネル・ビデオ 寸法：30分54秒 解説：《一時的なスタディ：ワークショップ＃1》の制作に協力した高校生6名を10年ぶりに集め、再びワークショップを行い撮影された映像作品。参加者たちが過ごした10年間についての個人的な回想を、歴史や人権、共生社会について社会全体の出来事や歴史と交錯させている。 取得額：－ 展示予定：2025年度「セカイノコトワリ」展で展示したほか、2027年1月から愛知県美術館での巡回展での展示を予定している。
43 	種別：陶芸 作者名：西條茜(1989-) 作品名：惑星 制作年：2024年（令和6年） 材質・形状：陶 寸法：73.0×69.0×102.0 解説：浴槽のようなくぼみから三つの管が伸びた陶による造形で、表面はモネの睡蓮の絵画を思わせる淡い緑とグレーの釉薬が施されている。本作は並んだ開口部に3人のパフォーマーが密着して息を吹き込むことで音を奏でる。陶の内部の空洞を人間の内臓に見立てた有機的な造形によって、鑑賞者が自他の身体を意識するよう促す西條の作品は、今では現代美術の領域で注目を集めている。 取得額：－ 展示予定：2025年度「セカイノコトワリ」展で展示したほか、2027年1月から愛知県美術館での巡回展での展示を予定している。
44 	種別：その他 作者名：松井智恵(1960-) 作品名：ヒマラヤ／カイダン 制作年：2003年（平成15年） 材質・形状：シングルチャンネル・ビデオ・インスタレーション、木製ドア 寸法：サイズ可変、36分49秒 解説：二部構成による個展「ヒマラヤ」の第一部で展示された映像インスタレーション。黒いワンピース姿の松井が螺旋階段をゆっくりと這い上がり降りていく様子をとらえた映像が、木製のドアに投影される。螺旋階段を不自然な体勢で上下する作家の身体を通して、山を登る際の身体的負荷を可視化している。 取得額：－ 展示予定：2025年度「セカイノコトワリ」展で展示したほか、2027年1月から愛知県美術館での巡回展での展示を予定している。

45		種別	：	その他
		作者名	：	小谷元彦(1972-)
		作品名	：	Phantom-Limb
		制作年	：	1997年（平成9年）
		材質・形状	：	発色現像方式印画（5点組）
		寸法	：	(各)148.0×111.0
		解説	：	二部構成による個展「ヒマラヤ」の第一部で展示された映像インスタレーション。黒いワンピース姿の松井が螺旋階段をゆっくりと這い上がり降りていく様子を捉えた映像が、木製のドアに投影される。螺旋階段を不自然な体勢で上下する作家の身体を通して、山を登る際の身体的負荷を可視化している。
		取得額	：	-
		展示予定	：	2025年度「セカイノコトワリ」展で展示したほか、2027年1月から愛知県美術館での巡回展での展示を予定している。
ほか23点／計68点 購入総額：367,110,450円				